

下駄スケートの文化を後世に

小林さん

諏訪湖博物館に史料寄贈

皇太子時代の昭和天皇に献上示す文献2点



諏訪湖博物館に寄贈された下駄スケートに関する史料2点

下駄スケート発祥の地である下諏訪町の諏訪湖博物館・赤彦記念館に、下駄スケートに関する貴重な史料2点が寄贈された。1919（大正8）年、諏訪で金物雑貨店を営んでいた小林傳三郎さんが皇太子時代の昭和天皇に下駄スケートを献上したことを示す史料。小林さんの孫の故小林政信さんが受け継いでいたもので、政信さんの妻節子さん（83）＝諏訪市諏訪＝が夫の遺志を継いで同館に託した。（浜武司）

諏訪湖でスケートが始まったのは明治中期で、鉄道開通を機に多くの人が東京方面から訪れスケートを楽しんだという。しかし当時のスケート靴は海外製の高価な靴だったため、下諏訪宿の飾職・河西準之助が安価な下駄スケートを考案。スケート文化の普及に大きく貢献した。諏訪湖博物館の敷地内には「下駄スケート発祥の地」の記念碑が建っている。

寄贈史料の一つは、長野県を訪れた皇太子様に傳三郎さんが県を通じて下駄スケートを献上したことを証明する宮内庁東宮職から出された献上書。もう一つは、献上書が入った額の中から発見されたもので、献上書とともに傳三郎さんに送られたとみられる諏訪郡役所からの書簡。

節子さんは、同館の下駄スケートコレクションに登録有形民俗文化財に指定されたのをきっかけに、「下駄スケート発祥の下諏訪で役立ててほしい」という亡き夫の遺志を尊重して寄贈することに。「ようやく夫の思いが日の目を見た。諏訪のスケート文化を後世に伝えるために役立ててほしい」と話している。

同館では「残されている下駄スケートは多くあるが、文献は少ない。下諏訪の歴史、諏訪のスケート文化を伝える貴重な史料」としており、大切に保管し、機会があれば公開するとしている。